

# 帝国主義と福音

## ポストコロニアル批評による新約聖書の「福音」の読解 (4)

小林 昭博\*

### Imperialism and Gospel

### Reading the Term “Gospel” in the New Testament through Postcolonial Criticism (4)

Akihiro KOBAYASHI\*  
(Accepted 12 July 2018)

(承前)

#### 6. 新約聖書における「福音」の用法

##### 6.1. 新約聖書における「福音」の用例

新約聖書には、①名詞形 *εὐαγγέλιον* (福音) の用例が 75 回<sup>1)</sup>、②動詞形 *εὐαγγελίζομαι* (福音を告げ知らせる) の用例が 54 回、③派生語 *εὐαγγελιστής* (福音宣教師／福音告知者) の用例が 3 回、④合成語 *προεὐαγγελίζομαι* (予め福音を告げ知らせる) の用例が 1 回ある。したがって、「福音」関連の語は新約聖書全体で 133 回の用例を数えるということになる<sup>2)</sup>。「福音」関連語の新約聖書各文書における使用頻度は以下の図 1 に示した通りである<sup>3)</sup>。

図 1 「福音」関連語の新約聖書各文書の使用頻度

	①	②	③	④	合計
マタイ	4 <sup>4)</sup>	1 <sup>5)</sup>	—	—	5
マルコ	7 <sup>6)</sup>	—	—	—	7
ルカ	—	10 <sup>7)</sup>	—	—	10
ヨハネ	—	—	—	—	—

1) マルコ 16 : 15 の用例は後代の付加ゆえに除外した。  
2) マルコ 16 : 15 の用例は後代の付加ゆえに除外した。  
3) 以下に示す図では、表の書式の関係から、ギリシャ語の単語に付した①②③④の数字を代用する。  
4) マタイ 4 : 23, 9 : 35, 24 : 14, 26 : 13。  
5) マタイ 11 : 5。  
6) マルコ 1 : 1, 14, 15, 8 : 35, 10 : 29, 13 : 10, 14 : 9。ただし、マルコ 16 : 15 の用例は後代の付加ゆえに除外した。  
7) ルカ 1 : 19, 2 : 10, 3 : 18, 4 : 18, 43, 7 : 22, 8 : 1, 9 : 6, 16 : 16, 20 : 1。

図 1 つづき

	①	②	③	④	合計
使徒	2 <sup>8)</sup>	15 <sup>9)</sup>	1 <sup>10)</sup>	—	18
ローマ	9 <sup>11)</sup>	3 <sup>12)</sup>	—	—	12
I コリント	8 <sup>13)</sup>	6 <sup>14)</sup>	—	—	14
II コリント	8 <sup>15)</sup>	2 <sup>16)</sup>	—	—	10
ガラテヤ	7 <sup>17)</sup>	7 <sup>18)</sup>	—	1 <sup>19)</sup>	15
エフェソ	4 <sup>20)</sup>	2 <sup>21)</sup>	1 <sup>22)</sup>	—	7
フィリピ	9 <sup>23)</sup>	—	—	—	9
コロサイ	2 <sup>24)</sup>	—	—	—	2
I テサロニケ	6 <sup>25)</sup>	1 <sup>26)</sup>	—	—	7
II テサロニケ	2 <sup>27)</sup>	—	—	—	2

8) 使徒 15 : 7, 20 : 24。  
9) 使徒 5 : 42, 8 : 4, 12, 25, 35, 40, 10 : 36, 11 : 20, 13 : 32, 14 : 7, 15, 21, 15 : 35, 16 : 10, 17 : 18。  
10) 使徒 21 : 8。  
11) ローマ 1 : 1, 9, 16, 2 : 16, 10 : 16, 11 : 28, 15 : 16, 19, 16 : 25。  
12) ローマ 1 : 15, 10 : 15, 15 : 20。  
13) I コリント 4 : 15, 9 : 12, 14 (2回), 18 (2回), 23, 15 : 1。  
14) I コリント 1 : 17, 9 : 16 (2回), 18, 15 : 1, 2。  
15) II コリント 2 : 12, 4 : 3, 4, 8 : 18, 9 : 13, 10 : 14, 11 : 4, 7。  
16) II コリント 10 : 16, 11 : 7。  
17) ガラテヤ 1 : 6, 7, 11, 2 : 2, 5, 7, 14。  
18) ガラテヤ 1 : 8 (2回), 9, 11, 16, 23, 4 : 13。  
19) ガラテヤ 3 : 8。  
20) エフェソ 1 : 13, 3 : 6, 6 : 15, 19  
21) エフェソ 2 : 17, 3 : 8。  
22) エフェソ 4 : 11。  
23) フィリピ 1 : 5, 7, 12, 16, 27 (2回), 2 : 22, 4 : 3, 15。  
24) コロサイ 1 : 5, 23。  
25) I テサロニケ 1 : 5, 2 : 2, 4, 8, 9, 3 : 2。  
26) I テサロニケ 3 : 6。  
27) II テサロニケ 1 : 8, 2 : 14。

\* 酪農学園大学農食環境学群循環農学類キリスト教応用倫理学研究室  
Christian Studies and Applied Ethics, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences, Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan

図 1 つづき

	①	②	③	④	合計
I テモテ	1 <sup>28)</sup>	—	—	—	1
II テモテ	3 <sup>29)</sup>	—	1 <sup>30)</sup>	—	4
テトス	—	—	—	—	—
フィレモン	1 <sup>31)</sup>	—	—	—	1
ヘブライ	—	2 <sup>32)</sup>	—	—	2
ヤコブ	—	—	—	—	—
I ペトロ	1 <sup>33)</sup>	3 <sup>34)</sup>	—	—	4
II ペトロ	—	—	—	—	—
I ヨハネ	—	—	—	—	—
II ヨハネ	—	—	—	—	—
III ヨハネ	—	—	—	—	—
ユダ	—	—	—	—	—
黙示録	1 <sup>35)</sup>	2 <sup>36)</sup>	—	—	3
新約聖書合計	75	54	3	1	133

そして、「福音」関連語の新約聖書各文書群における使用頻度は以下の図 2 に示した通りである。

図 2 「福音」関連語の新約聖書各文書群の使用頻度

	①	②	③	④	合計
マタイ	4	1	—	—	5
マルコ	7 <sup>37)</sup>	—	—	—	7
ルカ文書	2	25	1	—	28
ヨハネ文書 <sup>38)</sup>	—	—	—	—	—
パウロ	48	19	—	1	68
擬似パウロ	12	2	2	—	16
ヘブライ	—	2	—	—	2
公同書簡 <sup>39)</sup>	1	3	—	—	4
黙示録	1	2	—	—	3
新約聖書合計	75	54	3	1	133

28) I テモテ 1:11。

29) II テモテ 1:8, 10, 2:8。

30) II テモテ 4:5。

31) フィレモン 13。

32) ヘブライ 4:2, 6。

33) I ペトロ 4:17。

34) I ペトロ 1:12, 25, 4:6。

35) 黙示 14:6。

36) 黙示 10:7, 14:6。

37) マルコ 16:15 の用例は後代の付加ゆえに除外した。

38) I ヨハネ, II ヨハネ, III ヨハネの 3 書簡はヨハネ文書に含めた。下注 39 参照。

39) I ヨハネ, II ヨハネ, III ヨハネの 3 書簡は公同書簡から除外した。上注 38 参照。

## 6.2. 新約聖書各文書における「福音」の用例の特徴

### 6.2.1. マルコ福音書, ルカ文書, パウロ書簡, 擬似パウロ書簡

図 1 と図 2 から分かるように、「福音」関連の語を好んで用いるのは、マルコ福音書, ルカ文書, パウロ書簡, 擬似パウロ書簡である。その特徴として、以下のことを指摘することが可能である。

マルコ福音書は名詞形 *εὐαγγέλιον* のみを用いており、動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の用例は皆無である。マルコの名詞形 *εὐαγγέλιον* の用法上の特徴は絶対用法であり、「福音」の絶対用法はマルコ以外には、マルコ以前に著されたパウロ書簡にのみみられるところから、両者の間の伝承史的關係が想定される。

マルコ福音書とは対照的に、ルカ文書では動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の用例が際立っており、ルカ文書全体では動詞形 *εὐαγγελίζομαι* は名詞形 *εὐαγγέλιον* の 12.5 倍用いられている。しかも、ルカ福音書には名詞形 *εὐαγγέλιον* の用例はなく、使徒言行録(使徒行伝)に 2 度使われているのみであり、ルカ文書の名詞形の用例はあくまで例外的と言える範囲に留まるものと言えよう。

パウロ書簡には名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の双方が用いられており、マルコとルカの間位置するかのように見受けられる。しかしながら、パウロ書簡では名詞形 *εὐαγγέλιον* は動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の 2.5 倍ほど用いられており、パウロが名詞形 *εὐαγγέλιον* を基調としていることが看取される。また、すでに述べたように、名詞形 *εὐαγγέλιον* の絶対用法はパウロとマルコにのみみられる特殊な用法であり、パウロとマルコとの間の伝承史的關係が推定される。

パウロを継ぐ擬似パウロ書簡でも名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の両語が用いられている。だが、擬似パウロ書簡は名詞形 *εὐαγγέλιον* を動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の 6 倍使用しており、名詞形 *εὐαγγέλιον* の使用比率はパウロ書簡のおよそ 2.4 倍に上る。したがって、擬似パウロ書簡の「福音」の用法は、名詞形 *εὐαγγέλιον* を基調とするパウロの用法をいっそう強めており、マルコの「福音」の用法に近づいていると判断しうるのである。

### 6.2.2. マタイ福音書, ヘブライ書, I ペトロ書, ヨハネ黙示録

図 1 と図 2 から窺えるように、マタイ福音書, ヘブライ書, I ペトロ書, ヨハネ黙示録には「福音」

の語が用いられている。上述したマルコ福音書、ルカ文書、パウロ書簡、擬似パウロ書簡に比べれば、その数は決して多いとは言えないが、これらの文書が用いる「福音」の用例上の特徴として、以下のことを指摘することができる。

マタイ福音書には名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の双方が用いられており、マルコとルカの用法の中間に位置する。もっとも、マタイ福音書では名詞形 *εὐαγγέλιον* は動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の4倍用いられており、その意味ではマタイはマルコの用法を踏襲していると思えることも可能である。だが、マタイの名詞形の4回の用例は基本的にはマルコを資料として写したものであり、動詞形の1回の用例はルカと共通するいわゆるQ資料から採用したものである。このような事情を勘案すると、マタイは積極的に「福音」の語を用いているわけではなく、資料を写すさいに消極的に「福音」の語を採用したものと考えられる<sup>40)</sup>。

共同書簡ではIペトロ書が名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の双方を使用しているが、Iペトロ書を除くと、それ以外の共同書簡の諸文書には1度も「福音」関連の語は使用されていない。Iペトロ書には名詞形 *εὐαγγέλιον* の用例が1回であるのに対して、動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の用例は3回あり、ルカ文書の用法に近いことが窺われる。

ヘブライ書には動詞形 *εὐαγγελίζομαι* が2度用いられているが、名詞形 *εὐαγγέλιον* は1度も現れない。したがって、ヘブライ書の用法はルカの用法に近似していることが看取される<sup>41)</sup>。

ヨハネ黙示録は名詞形 *εὐαγγέλιον* と動詞形 *εὐαγγελίζω* の双方を用いている。名詞形の用例が1回であるのに対して、動詞形の用例は2回であり、動詞形は名詞形の2倍使用されていることになる。しかしながら、用例数が少ないことを勘案すると、これは誤差の範囲として理解することが適切であろう。というのも、黙示14:6には名詞形と動詞形が

同一のセンテンスで用いられており、黙示録の著者が双方の語を問題なく使用していると判断できるからである。なお、「福音」を表す動詞は通常のギリシャ語では中動相の *εὐαγγελίζομαι* を用いるのだが、黙示録では2回とも能動相 *εὐαγγελίζω* が使われている<sup>42)</sup>。

### 6.2.3. ヨハネ文書、テトス書、ヤコブ書、IIペトロ書、ユダ書

図1と図2からも知られるように、ヨハネ文書に属するヨハネ福音書、Iヨハネ書、IIヨハネ書、IIIヨハネ書、擬似パウロ書簡のテトス書、共同書簡として知られるヤコブ書、IIペトロ書、ユダ書の8文書には「福音」関連の語が一度も使用されていない。これらの8文書をいちおう確認しておく。

ヨハネ文書は名詞形 *εὐαγγέλιον* も動詞形 *εὐαγγελίζομαι* のいずれも一度も使用していない。ヨハネ文書という新約聖書の重要な文書群に「福音」関連の語が一度も現れないというのは決して小さなことではない。しかも、福音書の名を冠するヨハネ福音書に「福音」の語が一度も使用されていないということも過小評価することはできないであろう。

擬似パウロ書簡ではテトス書のみが「福音」関連の語を一度も用いていない。これは何らかの特定の理由があるというのではなく、偶然と考えるのが適切であろう。

先にも述べたように、Iペトロ書を除く共同書簡のヤコブ書、IIペトロ書、ユダ書にも「福音」関連の語が全く現れない。共同書簡のケースは擬似パウロ書簡のケースとは正反対に、「福音」の語を用いているIペトロ書のみが例外ということになる。

ここで確認したように、新約聖書の27文書のうち、8文書が「福音」関連の語を一度も使用していない。これは新約聖書の29.6%の文書に相当する。全体の章数にすると、その半分の14.8%に当たる。この数値を小さいと取るか大きいと取るかは、解釈者によって異なるであろうが、少なくとも「福音」が新約聖書全体を貫く不可欠必須の中心的概念であると見なすことはできないことは確かである。この機会に「福音」をキリスト教の中心的概念だと思いついてしまっている現代のわたしたちが、一度立ち止まり、改めて新約聖書の「福音」について省察することが必要だと言えるのではないだろうか。

<sup>40)</sup> マタイがマルコの名詞形 *εὐαγγέλιον* の7回の用例を採用しているのは、その半分に満たない3回のみであり、半数以上の4回は *εὐαγγέλιον* の語を削除している。このことからマタイが「福音」の概念を積極的にその神学思想として理解してはいないことが窺い知られる。この問題について、詳しくは後述する。

<sup>41)</sup> 用例数が2回と少ないゆえに、名詞形 *εὐαγγέλιον* が用いられていないのは偶然との判断をすることも不可能ではないが、ヘブライ書の著者は動詞を中心とするユダヤ的用法によって「福音」の語を使用していると見なしうることから、ヘブライ書には名詞の *εὐαγγέλιον* が現れないと考えられる。この点については、後述(6.3.)の議論を参照。

<sup>42)</sup> 詳しくは、後述(6.3.2.4.)を参照。

#### 6.2.4. 派生語 εὐαγγελιστής と合成語 προεὐαγγελίζομαι

派生語の εὐαγγελιστής は、使徒 21:8, エフェソ 4:11, II テモテ 4:5 の 3 回用いられている。パウロがこの語を用いていないことを考えると、パウロ以降の時代にパウロ圏のキリスト教において「福音」の概念がコンセンサスを持つようになり、その福音を宣べ伝える者を表す術語として εὐαγγελιστής が用いられるようになったものと推察できる。

合成語の προεὐαγγελίζομαι はパウロがガラテヤ 3:8 において 1 度だけ用いている語である。この語は古典ギリシャ語には現れない語であり、パウロ以前にはフィロンが用いているのみである<sup>43)</sup>。この語はパウロが「福音」と見なす「信による義」を、神がアブラハムに「予め福音として告げ知らせていた」ことを伝えており、パウロが「福音」をユダヤ教聖書（旧約聖書）から発するものとして提示していたことを表している。

### 6.3. 新約聖書における「福音」の用法

#### 6.3.1. 新約聖書における「福音」の 3 用法 — ギリシャ・ローマ的用法, ユダヤ的用法, キリスト教的用法

すでに述べたように<sup>44)</sup>、ギリシャ語の「良い知らせ」の用法には、名詞形 εὐαγγέλιον と動詞形 εὐαγγελίζομαι の双方を用いるギリシャ・ローマ的用法と動詞形 εὐαγγελίζομαι を中心とするユダヤ的用法のふたつの用法があることが認められる。そのさいに確認した両用法の分類は以下の図 3 の通りである。

図 3 ギリシャ語の「良い知らせ」の用法

用法	文書
ギリシャ・ローマ的用法	ギリシャ語文書, ヨセフス
ユダヤ的用法	ギリシャ語 70 人訳聖書, フィロン

そして、両用法を新約聖書の各文書に適用すると、以下の図 4 のように分類される。

図 4 ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法の適用

用法	文書
ギリシャ・ローマ的用法	パウロ, 擬似パウロ, I ペトロ, 黙示録, マタイ
ユダヤ的用法	ルカ文書, ヘブライ

だが、両用法に当てはまらない文書がある。マルコ福音書である。すでに確認したように、マルコは名詞形の εὐαγγέλιον のみを用いている。したがって、マルコ福音書の「福音」の用法はギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法のいずれにも属さないゆえに、新約聖書の「福音」の用法を類型化するためには、ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法に加えて、マルコ福音書の用法である名詞的用法を新たに加える必要がある。ここではマルコに特有の名詞的用法をキリスト教的用法と名付け、その用法を加えたうえで、改めて新約聖書の各文書の用法を以下に図 5 として提示する。

図 5 新約聖書における「福音」の 3 用法

用法	文書
ギリシャ・ローマ的用法	パウロ, 擬似パウロ, I ペトロ, 黙示録, マタイ
ユダヤ的用法	ルカ文書, ヘブライ
キリスト教的用法	マルコ

#### 6.3.2. ギリシャ・ローマ的用法

— パウロ書簡, 擬似パウロ書簡, I ペテロ書, ヨハネ黙示録, マタイ福音書

##### 6.3.2.1. パウロ書簡における「福音」の用法

パウロはギリシャ語を第一言語とするディアスポラのユダヤ人である。したがって、彼がギリシャ・ローマ的用法によって「福音」の語を用いているのは、パウロがギリシャ・ローマ世界を生活環境とするヘレニスト・ユダヤ人だったことから考えても、それは謂わば当然のことだと言えよう<sup>45)</sup>。

しかし、問題はそれほど単純ではない。彼がヘレニスト・ユダヤ人として、ギリシャ・ローマ世界の哲学や思想に通じていたことは広く知られている。パウロが彼の先人であり同時代人でもあるユダヤ人哲学者フィロンと比較対照される所以である。だが、パウロがフィロンと比較されるのは、このふたりが単にヘレニズムの知識人であったからだけではなく、両者の思想がユダヤ教聖書（ギリシャ語 70 人

<sup>43)</sup> フィロン『世界の創造』34, 『改名』158, 『アブラハム』153。

<sup>44)</sup> 拙論「帝国主義と福音 — ポストコロニアル批評による新約聖書の『福音』の読解 (3)」『酪農学園大学紀要 人文社会科学編』42 巻 2 号, 酪農学園大学, 2018 年, 53-59 頁参照。

<sup>45)</sup> ルードルフ・ブルトマン『新約聖書神学 I』(ブルトマン著作集 3) 川端純四郎訳, 新教出版社, 1980 年, 110-112 頁参照。

訳聖書)を基底としていたことが深く関与している。したがって、パウロの「福音」の用法を考察するうえで、彼が用いる「福音」とユダヤ教聖書(旧約聖書)との関係を考慮から外すことはできない。

実際、ローマ10:15において、パウロはイザヤ52:7の εὐαγγελίζομαι を引用して、以下のように述べている<sup>46)</sup>。

では、もし遣わされないのならば、どのようにして人々は宣べ伝えようとするであろうか。〔聖書に〕書かれているように、「良いこと〔ども〕を福音として告げ知らせる者たちの足はいかに美しいことよ」。

πὼς δὲ κηρύξωσιν ἐὰν μὴ ἀποσταλώσιν; καθὼς γέγραπται ὡς ὄραιοι οἱ πόδες τῶν εὐαγγελιζομένων [τὰ] ἀγαθὰ.

この引用からも解せられるように、パウロの「福音」理解はイザヤ書(第二イザヤ)の「良い知らせ」(עֲבוּרָה/εὐαγγελίζομαι)と密接に結び付いており<sup>47)</sup>、パウロの「福音」の思想的背景には、ヘブライ語聖書とそれを継ぐギリシャ語70人訳聖書の動詞形 עֲבוּרָה/εὐαγγελίζομαι をも措定することが肝要である。したがって、パウロの動詞形 εὐαγγελίζομαι の用例に関しては、ギリシャ・ローマ的用法のみならず、ユダヤ的用法をも考慮に入れて論じることが不可欠である。

また、パウロは名詞形 εὐαγγέλιον を用いるさいに、その48の用例のうち、半数近い22の用例において、絶対用法によって εὐαγγέλιον の語を使用している<sup>48)</sup>。名詞形 εὐαγγέλιον の絶対用法は、ギリ

シャ・ローマ世界とユダヤ世界の双方において、直接的な類例を確認しえないにもかかわらず<sup>49)</sup>、パウロ書簡の読者たちにとっては自明のこのように用いられており<sup>50)</sup>、さらにマルコ福音書においても用いられていることから、ヘレニズム・キリスト教に帰される用法だと想定される<sup>51)</sup>。

さらに、パウロの用法を考察するうえで留意が必要なことは、パウロ書簡が新約聖書最古の文書群だということである。現存するパウロ書簡が著されたのは50年代と目されているが、この時代には名詞形の εὐαγγέλιον と動詞形の εὐαγγελίζομαι のいずれも、未だに「福音」というキリスト教の術語として確立されていたとは言えず、パウロの「福音」の用法はギリシャ・ローマ世界とユダヤ世界の「良い知らせ」がキリスト教の「福音」に変わる端緒だったと考えられるのである。その意味では、パウロの「福音」の用法は、ギリシャ・ローマ的用法とユダヤ的用法の併用でもあり、キリスト教的用法の始まりだったとも言えるのではないだろうか。

### 6.3.2.2. 擬似パウロ書簡における「福音」の用法

擬似パウロ書簡における「福音」の用法の特徴は、先にも触れたように、パウロに比して名詞形 εὐαγγέλιον の用例が際立っていることにある。上述の図2から、パウロ書簡と擬似パウロ書簡のみを抜き出して、以下に図6として提示する。

図6 パウロ書簡と擬似パウロ書簡の名詞形と動詞形の使用頻度

	名詞形	動詞形	合計
パウロ書簡	48	19	67
擬似パウロ書簡	12	2	14

図6からも分かるように、名詞形 εὐαγγέλιον の用例が動詞形 εὐαγγελίζομαι の用例を圧倒するという傾向は、擬似パウロ書簡がギリシャ・ローマ的用法からキリスト教的用法に変化していることを意味する。しかも、この変化はパウロ書簡と擬似パウロ書簡の各文書の使用頻度を確認することでいっそう明らかとなる。以下に図7と図8として、パウロ書簡と擬似パウロ書簡の各文書の「福音」の使用頻度を提示する。

<sup>46)</sup> ローマ1:15におけるイザヤ52:7の引用の問題については、Peter Stuhlmacher, *Das paulinische Evangelium I. Vorgeschichte*, FRLANT 95, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1968, 247-254; idem, *Das paulinische Evangelium*, in: idem (Hrsg.), *Das Evangelium und die Evangelien. Vorträge vom Tübinger Symposium 1982*, WUNT 28, Tübingen: Mohr Siebeck, 1983, 157-182; Karl O. Sanders, *Paul—One of the Prophets? A Contribution to the Apostle's Self-Understanding*, WUNT II/43, Tübingen: Mohr Siebeck, 1991, 166-170を参照。

<sup>47)</sup> Evans, *VTSup* LXX/2, 687f. は、ローマ10:14-15において、イザヤ52:7(第二イザヤ)が直接引用されているだけでなく、14, 15節の「宣べ伝える」(κηρύσσω)と「遣わす」(ἀποστέλλω)という語の組み合わせが、イザヤ61:1(第三イザヤ)を示唆していると見なしており、パウロの福音の背景としては、イザヤ書が特に重要であることが理解できる。

<sup>48)</sup> ローマ1:16, 10:16, 11:28, Iコリント4:15, 9:14(2回), 18(2回), 23, IIコリント8:18, ガラテヤ2:5, 14, フィリピ1:5, 7, 12, 16, 27, 2:2, 4:3, 15, Iテサロニケ2:4, フィレモン13。

<sup>49)</sup> Stuhlmacher, *Das paulinische Evangelium I*, 135.

<sup>50)</sup> Friedrich, *ThWNT* II, 726f.

<sup>51)</sup> 詳細は、ブルトマン『新約聖書神学I』111-112頁参照。

図7 パウロ書簡各文書の名詞形と動詞形の使用頻度

	名詞形	動詞形	合計
ローマ	9	3	12
I コリント	8	6	14
II コリント	8	2	10
ガラテヤ	7	7	14
フィリピ	9	—	9
I テサロニケ	6	1	7
フィレモン	1	—	1

図8 擬似パウロ書簡各文書の名詞形と動詞形の使用頻度

	名詞形	動詞形	合計
エフェソ	4	2	6
コロサイ	2	—	2
II テサロニケ	2	—	2
I テモテ	1	—	1
II テモテ	3	—	3
テトス	—	—	—

図7からも分かるように、パウロの場合にも、フィリピ書とフィレモン書には動詞形の *εὐαγγελίζομαι* は使われていないが、パウロ全体としてみると、名詞形 *εὐαγγέλιον* を基調としつつも、動詞形も数多く使われている。

それに対して、図8から窺われるのは、擬似パウロ書簡において動詞形の *εὐαγγελίζομαι* を用いているのはエフェソ書のみであり、他の擬似パウロ書簡には名詞形の *εὐαγγέλιον* しか現れないということである。さらに、パウロ書簡に比して、擬似パウロ書簡では名詞形の *εὐαγγέλιον* と動詞形の *εὐαγγελίζομαι* の双方の語の使用頻度が著しく減っていることも看取される。実情としては、コロサイ書、II テサロニケ書、I テモテ書、II テモテ書の4書簡はマルコの用法であるキリスト教的用法に分類すべきとの意見も見られるであろうが、擬似パウロ書簡における「福音」の語の使用頻度の減少という事情を勘案すると、積極的に「福音」の語によってイエスの事績を言い表すマルコ的なキリスト教的用法に擬似パウロ書簡を分類することは適切ではないと結論づけられる。

なお、擬似パウロ書簡における「福音」の内容については、詳しくは後述するが、その特徴についてここで短く言及しておきたい。擬似パウロ書簡の「福音」の用例は、基本的にはパウロ書簡の用例の延長線上にあると考えられるが、擬似パウロ書簡の特徴と言えるものも見受けられる。例えば、II テモテ 1:10 では「福音」と「苦難」とが結合しており、II

テサロニケ 2:8 では「福音」と「審判」の結び付きが見られ、I テモテ 1:11 には「至福の神の栄光の福音に従い」(*κατὰ το εὐαγγέλιον τῆς δόξης τοῦ μακαρίου θεοῦ*) という仰々しい言い回しが用いられており、これらの用例からパウロの時代よりも「福音」の概念がキリスト教的な概念として固まってきていることが読み取られる。おそらく、これは時代が下るに連れて、名詞形の *εὐαγγέλιον* がパウロ圏のキリスト教において、よりいっそうキリスト教的な「福音」を表す術語として確固たる地位を占めるようになっていたことを表しているものと考えられる。

### 6.3.2.3. I ペトロ書における「福音」の用法

共同書簡では、I ペテロ書のみが「福音」の語を用いている。その用法は、4回の用例のうち、名詞形の *εὐαγγέλιον* が1回と動詞形 *εὐαγγελίζομαι* が3回という割合であり、擬似パウロ書簡とは対照的に、ユダヤ的用法に接近しているように見受けられる。

動詞形 *εὐαγγελίζομαι* の用法を見ると、1:12 は「預言者」や「聖霊」が登場する文脈であり、直接的な引用や参照ではないが、イザヤ 61:1 の「良い知らせ」との思想的連関が想定でき、1:25 がイザヤ 40:9 の「良い知らせ」の引用であることから考えると、これら2箇所はユダヤ的用法の影響を受けていると言えるであろう。しかし、4:6 の「死者たちにも福音が告げ知らせられた」(*καὶ νεκροῖς εὐηγγελίσθη*) というテキストは、「キリストの冥府下り」(I ペトロ 3:19 参照) を意識しており、動詞形の *εὐαγγελίζομαι* がキリスト教の「福音」を表す術語として用いられていることが窺われる<sup>52)</sup>。

また、名詞形 *εὐαγγέλιον* が用いられている 4:17 の「神の福音に従わない者たちの結末」(*τὸ τέλος τῶν ἀπειθούντων τῷ τοῦ θεοῦ εὐαγγελίῳ*) というテキストは、審判や苦難と「福音」が結び付けられており、イザヤ書に代表される「福音」と「審判」とを関連づける用例に分類できるであろう。

### 6.3.2.4. ヨハネ黙示録における「福音」の用法

ヨハネ黙示録の3回の用例は、名詞形 *εὐαγγέλιον* の1回と動詞形 *εὐαγγελίζω* の2回である。動詞形 *εὐαγγελίζω* の2回の用例は、10:7 の *εὐηγγέλισον* と 14:6 の *εὐαγγελίσαι* であり、双方ともに

<sup>52)</sup> 詳しくは、Strecker, *EWNT* II, 175, 186f. = 『釈義事典』II, 105, 110 頁参照。

能動相で使用されている。動詞形の「福音」が能動相で現れるのは、新約聖書では黙示録の2回の用例のみである<sup>53)</sup>。この語の能動相での用法は後期ギリシャ語に属すが<sup>54)</sup>、通常の中動相と意味に変わりはない。

黙示 10:7 は、神が「福音を告げ知らせた」(εὐηγγέλισεν) という用例であり<sup>55)</sup>、メシアの到来と審判に関わっている。そして、黙示 14:6 は名詞形 εὐαγγέλιον と動詞形 εὐαγγελίζω (εὐαγγελίσαι) とが一緒に用いられているテキストであり、「福音を告げ知らせるために」(εὐαγγελίσαι)、天使が「永遠の福音を携えている」(ἔχοντα εὐαγγέλιον αἰώνιον) のだが<sup>56)</sup>、この「福音」もまた 10:7 と同じように審判と密接に関わっている<sup>57)</sup>。このように「福音」と「審判」を関連させるのは、ユダヤ教聖書(旧約聖書)の「良い知らせ」に特徴的なものであり、内容的にはユダヤ教聖書(旧約聖書)の影響下にあるものと思われる。

#### 6.3.2.5. マタイ福音書における「福音」の用法

マタイ福音書における「福音」の用例は、名詞形 4 回(4:23, 9:35, 24:14, 26:13)と動詞形 1 回(11:5)の合計 5 回である。マタイの名詞形 4 回の用例のうち、24:14 と 26:13 はそれぞれマルコ 13:10 と 14:9 を受け継いだものである。4:23 と 9:35 は要約的報告であり、マタイの編集に属する

が<sup>58)</sup>、4:23 はマルコ 1:39 を資料として用いており<sup>59)</sup>、9:35 は 4:23 の再現である<sup>60)</sup>。したがって、4:23 と 9:35 の「福音」もまたマルコから受け継いだものだと考えられる<sup>61)</sup>。

マタイはマルコやパウロのように名詞形 εὐαγγέλιον を絶対用法で使うことはしない。マルコを資料とする 24:14 と 26:13 では、τοῦτο の語を加え、前者は「王国のこの福音」(τοῦτο τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας)、後者は「この福音」(τὸ εὐαγγέλιον τοῦτο) に変えられており、指示代名詞の「この」(τοῦτο) を付加することによって、「福音」に限定を加えている<sup>62)</sup>。また、マルコを資料として、マタイが要約的報告としてまとめた 4:23 と 9:35 では、「王国の福音」(τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας) という表現が用いられており、マタイは「福音」を「王国の福音」、すなわち「天国の福音」(=「神の国の福音」) に限定して示している。おそらく、マタイはマルコに従って「福音」を名詞形で用いてはいるものの、マルコが絶対用法で提示するキリスト教的用法としての「福音」には違和感を覚えていたものと考えられる<sup>63)</sup>。

さらに、11:5 の「貧しい者たちは福音を告げ知らせられる」(πτωχοὶ εὐαγγελίζονται) というテキストにおいて、マタイは動詞形 εὐαγγελίζομαι を 1 回だけ使用しているが、これはルカ 7:22 と並行する Q 資料に属し、イザヤ 61:1 の「貧しい者たちに良い知らせを告げ知らせるために」(εὐαγγελίσασθαι πτωχοῖς) というテキストの反映だと考えられる<sup>64)</sup>。

該箇所の外側の欄外アパルトゥス参照。

<sup>60)</sup> ネストレ版ギリシャ語新約聖書の当該箇所の外側の欄外アパルトゥス参照。

<sup>61)</sup> なお、4:23 と 9:35 におけるマタイの編集には、マルコ 1:14-15 のイエスによる「福音」宣教のモチーフが表れているという意見がある (Strecker, *EWNT* II, 185 = 『釈義事典』II, 109 頁, 小河陽『旧約の完成者イエス—マタイによる福音書』(福音書のイエス・キリスト1) 講談社, 1983 年, 280-281 頁参照)。

<sup>62)</sup> Strecker, *EWNT* II, 185 = 『釈義事典』II, 109 頁参照。

<sup>63)</sup> 田川建三『新約聖書 訳と註1—マルコ福音書/マタイ福音書』作品社, 2008 年, 131-133 頁参照。

<sup>64)</sup> マタイ 11:5 / ルカ 7:22 の πτωχοὶ εὐαγγελίζονται (貧しい者たちは福音を告げ知らせられる) という表現は、ギリシャ語 70 人訳聖書のイザヤ 61:1 (εὐαγγελίσασθαι πτωχοῖς 「貧しい者たちに良い知らせを告げ知らせるために」) の直接の引用ではなく、何らかの反映である。また、Werner G. Kümmel, *Jesu Antwort an Johannes den Täufer. Ein Beispiel zum Methodenproblem in der Jesuforschung*, Sitzungsberichte der wissenschaftlichen Gesellschaft an der Johann Wolfgang Goethe-Universität Frankfurt am Main, XI/4, Wiesbaden: Steiner, 1974, 156f. は、εὐαγγελίσειν の受動態での用法が非ギリシャ的であることから、εὐαγγελίσασθαι πτωχοῖς がアラム語に遡源することを示唆している。この問題については、John

<sup>53)</sup> このほかには、使徒 16:17 の異読 D\* (εὐαγγελίζοντες) に能動相の用例がある。また、ギリシャ語 70 人訳聖書の列王上 31:9 (εὐαγγελίζοντες) にも、使徒 16:17 の異読と同形の用例が使用されている。

<sup>54)</sup> Bauer/Aland, *Wörterbuch*, 642; Liddel/Scott/Jones, *Lexicon*, 704; Friedrich Blass/Albert Debrunner, *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*, bearbeitet von Friedrich Rehkopf, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 182001, § 309.

<sup>55)</sup> 神が「福音を告げ知らせる」用例は、黙示 10:7 のほかには、使徒 10:36 にしかない (Friedrich, *ThWNT* II, 718 参照)。

<sup>56)</sup> 天使が「福音を告げ知らせる」用例は、黙示 14:6 以外では、ルカ 1:19 (ザカリアに対する洗礼者ヨハネの誕生告知) と 2:10 (羊飼いたちに対するイエスの誕生告知) のみである (Friedrich, *ThWNT* II, 718)。ルカと黙示録に共通するのは、メシアの到来によってもたらせられる救いが εὐαγγελίζομαι の語によって言い表されているということである (Friedrich, *ThWNT* II, 718 参照)。なお、天使が名詞形 εὐαγγέλιον と関係するのは、黙示 14:6 のみである。

<sup>57)</sup> Friedrich, *ThWNT* II, 733; Strecker, *EWNT* II, 186 = 『釈義事典』II, 110 頁を参照。

<sup>58)</sup> プルトマン『新約聖書神学 II』111 頁。

<sup>59)</sup> ネストレ版ギリシャ語新約聖書 (Eberhart et Erwin Nestle/Barbara et Kurt Aland (ed.), *Novum Testamentum Graece*, 28. revidierte Auflage, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012, 5. korrigierter Druck, 2016) の当

このテキストはイエスがメシアであることを旧約聖書の成就として証言するうえでの頂点をなす発言と目されており<sup>65)</sup>、マルコに倣って名詞での用法が多いマタイではあるが、内容上の重要性に加えて、ギ

リシャ語を第一言語とするマタイにとっては、動詞形の εὐαγγελίζομαι も違和感なく使用することができたのであろう<sup>66)</sup>。

(続く)

---

Nolland, *Luke 1-9:20*, WBC 35A, Dallas: Word Books, 1989, 330 をも参照。

<sup>65)</sup> Friedrich, *ThWNT* II, 715.

---

<sup>66)</sup> 田川建三『新約聖書 訳と註1』131-133 頁参照。